
雪山の秘密～仮面ライダー鋭鬼～

羽衣石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪山の秘密〜仮面ライダー 鋭鬼〜

【Nコード】

N1054M

【作者名】

羽 衣石

【あらすじ】

数年前のこと、雪山で遭難したフブキを救出すべくエイキは猛吹雪の中を疾走した。ついにフブキを見つけ出したエイキ。だが二人に更なる危機が迫る。そしてその時ザンキは……。??『仮面ライダー 響鬼』の二次創作作品……の、御堂志生さんの著作『僕たちにはヒーローがいる〜仮面ライダー 吹雪鬼〜』の三次創作作品です。? 1 年齢制限はつきませんが若干の下ネタを含みます。つけるほどのモンじゃないと信じておりますが、気になさる方はご注意ください。遠慮いただいた方がよろしいかもしれません。? 2 かなりふざ

けた内容です。真面目な響鬼ファンの方はご遠慮いただいた方がよろしいかもしれません。？ 3 こと、ザンキさんファンや松田賢二さんのファンの方はご遠慮いただいた方がよろしいかもしれません。？ 4 以上の点でご意見やお怒りの点があればくれぐれも筆者の方へお願いします。本作につきまして、御堂志生さんには一切の責任はありません。？ 5 などとぐだぐだ書いてますが、ほんと大したお話ではありませんので、適当に流してやってください。

（前書き）

『仮面ライダー響鬼』の二次創作作品……の、御堂志生さんの著作『僕たちにはヒーローがいる』仮面ライダー吹雪鬼』の三次創作作品です。

1 年齢制限はつけませんが若干の下ネタを含みます。つけるほどのモンじゃないと信じておりますが、気になさる方はご遠慮いただいた方がよろしいかもしれません。

2 かなりふざけた内容です。真面目な響鬼ファンの方はご遠慮いただいた方がよろしいかもしれません。

3 こと、ザンキさんファンや松田賢二さんのファンの方はご遠慮いただいた方がよろしいかもしれません。

4 以上の点でご意見やお怒りの点があればくれぐれも筆者の方へお願いします。本作につきまして、御堂志生さんには一切の責任はありません。

5 などとぐだぐだ書いてますが、ほんと大したお話ではありませんので、適当に流してやってください。

柴又の街、帝釈天門前の表通りから少し離れた一角で甘味処たちはなは営業している。帝釈様の参拝客と名作映画にまつわる地を訪れる観光客の喧騒から離れて、静かにお茶と和菓子を味わうことの出来る店として客足は途絶えることはなかった。

店舗と厨房の間にある六畳間が、従業員の休憩室になっている。もつとも今この部屋にいるのは、長年出入りしているにも関わらず一度たりとも店を手伝ったことのない男だった。

「うーん、今月号の扉もこれまたまらんなあ。」

ジャージ姿でいるのは、過激な走りこみを始めとする日課の鍛錬をこなした後だからだ。言うことやること、どこかずれた男ではあるが一人黙々と鍛える時の姿は若い同僚達を圧倒する。しかしながらその後、こうやって分厚い漫画雑誌を読んだりするものだから女性陣に叱られたりするのである。

「もー、エイキさん。たまには手伝ってくださいよ。」

柳茶色のモンペ姿で店と奥を行ったりきたりする立花香須実が一言残して店へと駆けていく。

「ダ〜メ、俺今日はインターバルだし。」

漫画雑誌から視線を戻すことなくエイキは返事をした。待機任務インターバルと言ってもそれは飲食業のことではなく、人間を襲う魔化魍を倒す『鬼』の任務のことである。ここ、たちはなはそんな鬼たちの所属する団体『猛士』の関東地方における拠点であった。

この日はエイキにとって重要な日である。彼の愛読書である、某月刊漫画雑誌の発売日なのだ。こうなれば読み終わるまでは挺てこでも動かない。

胡坐をかいて漫画を読むエイキに背を向ける形で、リョクオオザルのジョージが新聞を読んでいた。リョクオオザルとは直径十五センチほどの円盤型と動物型に変形するディスクアニマルと呼ばれる

機器の一種であるが、古来より猛士の中で使役されてきた式神の流れを組むものである。ひとつひとつに魂が封じられ、並みの犬や猿以上の知性を持つ。だが新聞を読むディスクアニマルなど、全国の猛士の本部支部にあってもジョージ以外にありはしない。

「ジョージは多分エイキより頭がいいぞ。」

関係者の間では広く流布された噂であるが、当のエイキは特に気にした様子でもない。

やがてエイキが漫画雑誌を読み終わり、ジョージも読み終えた新聞をたたんで卓袱台ちゃぶだいの上に戻そうとした所へ、店の方からどたばたと走ってくる音が聞こえてきた。

「エイキさん、エイキさん、エイキさん！」

大声で連呼しながら飛びこんで来たのは、鬼の候補生というか修行の身である戸田山であつた。その後からは、後輩の鬼に当たるイブキもやつて来た。

「犬みたいに呼ぶんじゃない！」

エイキの怒声を戸田山は全く聞いていなかった。

「ぎ、ざざざ、ザンキさんとフブキさんの間に昔何があつたんすか！」

「何の話だよ？……って戸田山あ！うつとおしいから離れる。おい、イブキ。一体何なんだ？」

「いやあ、ですからね。さつき事務局長とフブキさんが話しているのが聞こえちゃったんですよ。」

イブキがおつとりとした口調で話す。育ちの良さそうな青年だが、鬼としてはなかなかの手熟てだれである。もっともノリが違つというやつで、エイキはいささか苦手であつた。

「何て？」

「事務局長がですね、『ザンキ君とのことはもういいじゃないか』って仰つてましてね。」

「そしたらフブキさん、『だって、わたしあの時はすごくショックだったんです』なんて……。」

イブキの言葉を戸田山が続ける。それを聞いたエイキが、
「もしかして、あのことかな？」

などと言うと、戸田山はエイキの首を絞めるが如き勢いですがりつ
いてきた。

「教えてください、一体何があつたんすかー！」

「戸田山さん、落ち着いて。」

後ろからイブキが戸田山を引っばるものだから、エイキの首に更
に力がかかる。

「お前ら、オレを殺す気かあ！」

ちゃぶだい
卓袱台の上では、そんな人間たちのすちやらかぶりを尻目にジヨ
ージがお茶を入れていた。

「落ち着け、戸田山。いいか、ザンキさんはフブキの師匠であり、
フブキはお前の姉弟子だ。そんなコトになるわけないのは、お前だ
つて十分わかるだろう。」

「だけど、雪山で遭難した時のことらしいじゃないっすか？そんな
時は、その、素っ裸で身体を暖め合つとか……。」

戸田山が、自分の発言に顔を真っ赤にした。

「漫画の読み過ぎだよ。」

「いや、エイキさんほどではないでしょう。」

イブキが冷静にツツコミを入れる。それを無視して、エイキが戸
田山を諭した。

「ザンキさんはそつちの方でも鬼みたいな人だけど、まだフブキが
未成年のころの話だぜ。」

「でも、男と女のことっすよ。」

「ばかやろっ、それだつたらあきらなんかとくにイブキの子供産
んでるぜ。」

「人聞きの悪いこと言わないで下さい！」

ジヨージが三人それぞれの前に湯呑みを置いて回った。温度も濃
さも絶妙な加減であり、お茶を一口飲んで場の空気は一旦落ち着い
た。

「フブキは、おやつさんとこれから吉野だったな。ザンキさんは？」
「定期健診つす。」

「んじゃ、しばらく帰って来ないか……。」

エイキが飲み干して差し出した湯呑みに、ジョージが再度お茶を注いだ。そして、ついにエイキは語り始めたのである。

「いいか、お前ら。この話は他言無用だぞ。」

それはエイキが免許皆伝となる前の年の冬のことだった。

出勤したザンキが消息を絶って丸一日、猛士関東支部立花事務局長の緊急指令により手すきの鬼は現地の搜索に動員された。当時はまだ正式に鬼にはなっていなかったものの、変身可能なまでに修行が進んでいたエイキも先輩達の指揮下に入り懸命な搜索活動に当たっていた。

最も安否が気遣われたのは、ザンキの弟子である藤倉双葉、後のフブキであった。すでに修行を始めて三年近く経っていた彼女だが、未だ変身することすらかなわぬ身であった。関東において筆頭と言っても良いほどの実力者であるザンキの庇護のもとにあれば心配はないはずだったが、極寒の山中にあつて連絡が途絶えた状態であつては変身できぬ双葉の身の危険が案じられた。いかなザンキとは言え、悪条件の中で魔化魍と遭遇して双葉の身を守りきれるかどうか。事務局長はその点を心配し搜索指令を発したのである。

エイキは双葉と同期であり、彼女の身を殊のほか案じていた。だから裁鬼の放ったアカネタカが帰ってきたのを見るなり飛び出して制止しようとした先輩達とはぐれてしまったのだ。茶褐色の体色に濃緑の隈取と角を持つ鬼の姿で、エイキは雪原を疾走した。右足が雪に沈む前に左足を出し、その左足が沈むより早く右足を出す。尋常ならざる身体能力を駆使して、エイキは吹雪の中を飛翔するアカネタカの後を追ったのである。

「あれ、そのころはまだ鋭鬼の名前は襲名してませんよね？」

「いや、まあそうなんだけどな。修行始める前から、引退してた先代が襲名を事務局長に申し出たこともあってよ。何となくエイキって呼ばれてたんだ。」

「先代っておっしゃいますと、エイキさんのおじいさんでしたね。」
「母方のな。」

「そんなことはいいすから。それで、どうなったんすか？」

林を迂回し、溪流沿いをエイキは駆け抜けた。低空で飛行するアカネタカを追いながら、ただ前に進むことしか考えていなかった。

ともすると猛吹雪の中、アカネタカの発する信号が聞き取れなくなる。修行途中のエイキには、まだ他の鬼の操るディスクアニマルと意志を交わすことが十分にできない。エイキの肩に乗ってついてきたジョージが、アカネタカの声を感じて方向を指し示すことで補佐した。だが、先行するアカネタカも追隨するジョージも目的地を直線的に把握していて、エイキの走る地形まで認知していなかった。

エイキの目の前で急に川風が向きを変える。白一色だった視界が急に晴れると、エイキは自分が青黒く渦巻く淵に向かって突進していることに気がついた。

「うおー！ー！ー！」

喚声を上げてエイキは崖っぷちから跳躍した。一人前の鬼であったなら対岸まで飛び越えられたかもしれない。残念なことにエイキは途中で失速し、極寒の山中で派手な水しぶきと共に淵の中に落下した。

水中で必死にもがくエイキと、そんなエイキに必死でしがみつくジョージ。ようやく河岸に這い上がると、エイキは気合を入れて全身に力をこめた。外傷をふさぐのと同じ術を用いて、冷えきった身

体を気で温め直す。そしてジョージを円盤型に戻すと変身音叉に取り付け、回転させて水分を払い落とした。

再度変形したジョージがエイキの頭の上に乗り、アカネタカとの交信を図った。しかし激しい吹雪の中で双方が交信を途絶えさせてしまつと、接触を図ることは容易ではない。

「くっそー、あのタカどこに行つちまいやがつたんだ！」

エイキが地団駄を踏んだその時である。

「あの巨木を目指してまっすぐにお進みなさい。」

すぐそばの岩に腰掛けていた女性が下流を指差して言った。

「ありがとよっ！」

その声に即座に反応して、エイキは振り向きもせず駆け出した。だがジョージは、エイキにしがみついて体勢を整えると声の主の姿を求めて後方を見た。這い上がった河岸には人影は無く、それも遠ざかり吹きすさぶ雪に阻まれてあつという間に見えなくなった。

今の女の人、吹雪の山の中で何してたのかな？

ジョージは疑念を抱いたのだが、エイキの方は双葉の身を案じ謎の女のことなどすでに忘れてしまっていた。

目指す巨木に辿り着くと、上空をアカネタカが旋回している。エイキは飛び上がった幹を蹴り、枝から枝を伝って登っていった。中腹辺りの太い枝にエイキが屹立すると、アカネタカはそこから南に向かつて飛んだ。白一色の景色の中、一キロメートルほど先に森の切れ目のような開けた場所が見える。飛来するアカネタカに気づいたのか、ふいに雪原の中に赤い人影が小さく現れた。双葉が冬場に着用するダウンジャケットの色に間違いない。

「あそこか！」

エイキは迷うことなく樹上から飛び降り、南へと進んでいった。

ジョージが煎餅を菓子鉢に入れて、三人の鬼（修行中含む）たちの前に差し出した。

「ジョージさん、すみません。ありがとうございます。」

頭を下げる戸田山に、ジョージも慌ててお辞儀をする。修行中はジョージのことも先輩だと思え、エイキがそう言ったのを戸田山は律儀に守っている。冗談のつもりでありイブキの弟子であるあきらにはそのようことは命じていないのだが、リョクオオザルに敬語を使う戸田山の姿が面白いのでそのままにしている。

「で、ザンキさんとフブキさんは無事だったんですか？」

手に取った煎餅を半分に割って口に入れながらイブキが尋ねた。

「まあ、その段階ではまだ魔化魍との戦闘にはなってなかったんだよ。」

「双葉ー！」

雪原を駆けながらエイキは呼んだ。

「エイキー！」

藤倉双葉もまた、エイキ目指して雪の中をもがくように駆け寄る。そして……エイキに跳び蹴りをかました。

「遅い！」

「痛い……助けに来てやったのに、何だその言い草は！」

「師匠が、ザンキさんが大変なのよ！」

エイキは双葉が走ってきた方を見た。そこには直径五メートルほどのかまくらが作られていた。

「姫も童子も捕捉できないうちに吹雪がどんどんひどくなってきて、寒さを凌ぐのに苦労したんだから。」

「ああ？まだ戦ってねえのかよ？」

そう言いながらエイキがかまくらを覗くと、双葉の師匠であるザンキは熟睡していたのである。

「ね、寝てたんすか？」

「まあ、ザンキさんくらい鍛えてたら雪に埋もれたまま寝たって死にやしないけどよ。」

「でもどうして？」

「だからよ、イブキ。冬場に出動する時は一本支給されるだろ。」

「ああ、バーボン……ってザンキさん、酔いつぶれちゃったんですか？」

「いつつもそうじゃねえか。呑んで熱く語るのはいいけど、沈没するのが早いんだよな。」

「そこがザンキさんのいい所っす！」

「わかりましたから。フブキさんは大丈夫だったんですか？」

「さて、ぎりぎり未成年の時だったから呑んだのかどうか。あいつ呑んでも全く顔に出ないからな。」

「ザルですからねえ。」

「むしろワクっす！」

「でよ、双葉。いったい何が出たんだよ。ユキグモか？オニクマか？」

エイキがリョクオオザルをディスクに戻しながら尋ねた。双葉が頭を振り不安げな表情を浮かべる。当時、思うように修行の進まない双葉はよくこんな顔をしていた。それを見てエイキは不憫に思い何かと気を遣っていたものだ。

「師匠が言うには、ウーかもしれないって。」

双葉は消え入りそうな声でつぶやいた。

「いや、まさかそんな……。」

「わかるよ、イブキ。俺もその時はそんな顔したぜ。」

「ウーって何すか？」

「雪山にだけ現れる魔化魍なんですけど、出現率が極めて低いんで

す。姫と童子が確認されていないことと、里に下りた記録が一切無いのでただの噂とも言われますけど。」

「全身を白くて長い毛に覆われているんで、雪女伝説の原型だなんて説もあるがな。問題は、こいつの身の丈はヤマビコの三倍近くあるってことなんだ。」

「えっ！エイキさん、三倍って。ありえないでしょう。」

「んなこと言ったって実際あったんだよ。」

突如吹雪がやんだ。そしてとてつもない咆哮が鳴り響き、エイキと双葉を驚かせる。二人が視線を移すと、そこには見たことも無い巨大な生物が立っていた。白く長い毛に全身を覆われた巨体。それは魔化魍と言うよりは怪獣だった。

エイキはかまくらからザンキの烈雷を取り出し身構える。怪獣が振り下ろす手を刃で斬りつけるが全く効果はない。太鼓の修行中であるエイキに弦の鬼の武具が使いこなせるはずがなく、背後に双葉をかばって後ずさりするしかなかった。しかし、怪獣が一步足を踏み出しただけで二人とも簡単に踏み潰されてしまうことだろう。

エイキも双葉もどうすることもできず、死に直面して震えていたその時である。かまくらがあった所で爆発が起きたかのように積もっていた雪が弾け飛んだ。そして雪煙の中から現れたのは、怪獣に匹敵する身の丈にまで巨大化した斬鬼であった。

「何ですって？」

「何すか？」

「いや、だからよ。変身したザンキさんが巨大化してだな……。」

「エイキさん、漫画の読み過ぎっすよ。」

「ホントなんだってばよー！そりゃ、あの時も誰も信じてくれなかったよ。ザンキさん自身が全く覚えてなかったし。」

「でも確か……唯一ウーを倒したとされる古文書の記録では、山のような鬼が現れたとか何とか記されているらしいですけど。」

「なあ、イブキよ。ザンキさんって古い呪術系の技も継承してるよな？その中に巨大化する術があんじゃないかねえのか？酔っ払ってそれを無意識に使ったとか。」

「いやあ、そんな術があるなんて僕は聞いたことないですけど。」

自分と双葉の身を守るのが精一杯だったエイキが知らないの無理からぬことであるが、ことの真相はこうである。

大怪獣が現れた時、ザンキはまだかまくらの中で熟睡中だった。その彼を起こす者がいた。

「起きなさい、財津原蔵王丸さん。しかしまあ、長い名前ですわね。わたくしほどではないですけど。」

揺り動かされてザンキは目をわずかに開く。今まで見たこともないほどの美女がそこにいたが、完全に目覚めぬザンキの目にははつきり映っていなかった。

「怪物が現れてしまいましたわ。あれはあなた方が魔化魍と呼ぶものとはいささか異なりますの。魔界と巨人界の狭間から時々人間界に現れてしまうやっかいな存在ですわ。本来ならわたくしが駆逐しなくてはならないのですが、あなたのお弟子さんたちに姿を見られたくないのです。ですからあなたが戦ってくださいませんかしら？」

「戦うさ。そのために来たのだからな。だが、お前は誰だ？」

朦朧とした意識で答えるザンキに女は優美な笑みを向けた。ザンキの腕に巻かれた変身具のふたを開くと、中に仕込まれた弦をしなやかな指で弾く。

「わたくしは女神ですわ。少しだけ、あなたに戦う力を貸して差し上げますから後のことはお願いいたします。」

かまくらの中で雷が乱れ飛び、ザンキは変身させられたのである。

濃緑の表皮に赤銅色の隈取と一本角を持つ、猛士に所属する全国の鬼の中でも屈指の強さを誇る斬鬼が見上げるほどの巨体となって雪原に屹立した。猛吹雪を物ともせず、身構えると、「でゅわっ!」としか聞こえない喚声を上げて大怪獣ウーに飛び掛った。

右手を水平に薙ぎ、ウーの胸を打つ。よろめきながらもウーは両手を激しく振り回す。風圧で降り積もった雪が再び舞い上がるほどだった。咆哮を上げて暴れるウーの両腕をかわしながら懷に潜り込んだ斬鬼は、白い毛に覆われた腹に鋭い蹴りをお見舞いする。苦しそうな仕草をするウーだったが、皮肉の厚い顔面に表情の変化は見えてなかった。

斬鬼は大振りの突きや蹴りを立て続けに繰り出すという、普段とは明らかに異なる戦術を取っていた。その強い一撃一撃が、ウーから確実に体力を奪っていく。

「もうすぐ三分経つわ。」

腕時計を見ながら双葉がつぶやく。それを聞いてエイキが言った。「あ?三分経つとどうなるんだ?」

「わかんない。」

斬鬼の胸に点滅する半球体は無かったが、彼も時間を気にしていたように見える。動きを止めたウーを見据えると、わずかに腰を落としたながら両手を胸の前で十字に組んだ。縦にした左の掌から青白い光条が、ウーにまっすぐ伸びていく。その光を身体を中心に受けて、ウーは大爆発を起こし肉片のひとつ残すことなく四散して消えた。

怪獣が消え去ると同時に、風は止み雪雲は流れ去った。青空のもと、冬の陽光を背に受けながら巨人、いや巨神となった斬鬼は足元に立つ二人の男女を見下ろしていた。

「そしてザンキさんはそのまま空高く飛び去っていった……。」

「んーなわけあるかいっ！」

敢えてボケたと思われるイブキの言葉に、エイキはツツコミを入れた。

「ザンキさん、すごいっす。俺、感動したっす。」

戸田山はもう、話の途中から鼻水垂らしながら号泣していた。この男、ザンキの話しなら結局何でも感動するのだろう。

「でも、そんなすごい話がどうして本部の記録にも残されてないんですか？」

今度はイブキが別の疑問を呈してきた。

「だから言つたろ。ザンキさんが全く覚えていないもんだから、俺がいくら説明したって与太話扱いされてきたんだよ。おやつさんだけは聞いてくれたけどよ、どっちにしても記録に残せる話じゃないってことになったんだ。」

「でも、フブキさんも見てらしたんでしょ？二人の証言が一緒なら無視できないんじゃない……。」

「フブキはこの件について、帰ってから一言も語らなかったよ。」

「何故ですか？」

「それはだな。」

エイキと双葉が見上げる中、巨大な斬鬼は少しずつその身体を縮めていった。十数^{とお}えるほどの間に半分にまで小さくなった。そしてその体表にも変化が表れ始めた。

「えっ？」

双葉が驚く。斬鬼の変身が解けていったのだ。だが顔の変身だけではなく、全身が鬼から人間体へと変わっていった。その身体の真正面を双葉に向けながら、ザンキの身体は小さくなっていった。

「えっ？それってつまり……。」

途中で声を失ったイブキの言葉に、エイキは返答した。

「そうだよ。ザンキさん、丸裸になって縮んでいったんだ。元の大きさに戻ってそのままばったり倒れちまったからな。案外立ってる間に気を失ってたのかも。」

「で、その、フブキさんは、ザンキさんが丸出しにしてるのを見ちゃったんすか？」

さすがの戸田山も、彼女が見た物の尋常ならざることに気づいたようである。

「そうだよ。呆然として、目を覆い隠すのも忘れてたって感じだったぜ。多分肉親以外のを見たの初めてだったんじゃないかな。」

そう言ってからエイキは一口お茶をすすった。そしてぼつりとつぶやいた。

「デカかったぜ。」

「いや、その、それは……。」

イブキは返答に窮してしまった。

「その後俺がザンキさん負ぶって帰ったんだけどな。フブキのやつ、山下りる間中ずっと泣いてたぜ。さすがにショックだったみたいだ。」

「それで、さっきの事務局長との話になるわけなんですな。」

「そういうことだったんすか。俺、フブキさんのこと変に勘繰っちゃったりして、申し訳ないっす。」

「蒸し返さない方がいいだろうな。」

そう言ったエイキの脇腹を、ジョージがちょんちょんとつつき続けていた。

「何だよ、後にしろって……はうつー！」

ジョージが指し示す方を見てエイキは絶句し、続いてイブキと戸田山も凍りついた。

部屋の入り口で、ザンキが鬼の形相で立っていたからである。

完っ！

（後書き）

御堂志生さまっ、これが真相です！

響鬼ファンの皆さま、ザンキさんファンの皆さま、特撮ファンの皆さま。

本当に申し訳ありませんでした。 m (_ _) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1054m/>

雪山の秘密～仮面ライダー鋭鬼～

2010年10月8日14時31分発行